

# 中国のある古美術品取引の観察

——廈門古美術品商店街のケーススタディ——

シドニー・チャン

## はじめに

古美術品研究はノスタルジア、伝統主義、近代主義、そして美術に関する個人主義的嗜好性などと複雑に絡み合っている。社会学者や文化人類学者が関心をもつて当然の対象でもある。しかし、人類学的研究に絞ってこれを見れば、古美術品に関する研究は、他の一般的な物財文化に関する研究とは、まったく異なったものであると思われる。つまり、古美術品は保管家や収集家の手から手へと渡る性格を持つていること、それらの価格が第三者には分かりにくい仕組みによって取引されること、そしてその取引自体が往々にして複雑な人間関係や目に見えにくい非公式な制度のもの



とで行われていることが、その要因である。

同様に特徴的なことは、古美術品の社会的価値と取引価格の決め方は激しい競争を背景にしていることが普通である点である。一方で、取引に関しては一定の法的規制があるという微妙な問題が横たわっている。

これらの問題が、古美術品ビジネス研究の取組みを難しくし、かつ複雑なものにしているのである。とくに古美術品取引が行われる場所は公的に表にでない場合が多く、それを探ることもほとんど不可能に近いという問題がある。

さらにいえば、古美術品取引を研究することは、農村と都市の中で行われる王墓盗掘、略奪、密貿易のような法的・倫理的な問題の存在を明らかにすることでもある(De Varine 1983, Doar 1998, Murphy 1995)。

このような入り組んだ問題があるが、本稿の主な目的は、いかに密貿易が行われているか、あるいはいかに王墓盗掘品が売買されるかを調べるのではなく、零細な古美術商の取引の実態や古美術品取引が、華南における彼らのライフスタイルにどのような変化を与えたかについて観察することに置かれている。

本研究の視角として、筆者はまず、木製家具の生産と輸出を行った福建中央部に位置するある村の最近の変化の様子と、これに関連して最近現れた農村のビジネスが起す新しい動きについて述べたい。

第二に古美術品が持つ意味が変化している様子を明確にするために、事例的に廈門の古美術品商店街に焦点を当ててみたい。改革開放以後の影響のため起きている中国の変化を与件とすると、文化上の遺物（中国語で言う文物）の定義の仕方が変わってきていること、とくにそれらが公有物から私有物としての財産へと変化してきつつある点の理解が重要である。したがって筆者もまた、まず、古美術品や文化上の遺物の定義についての簡単な説明をしておかなければならない。

第三にいかにして古美術品取引が都市の発展に影響を与え関係しているか、とくに、そのために人びとが農村地区から中国の沿岸都市部へ流入することがもたらす、都市化について議論してみたい。

以上を考察することによって、海外との結びつきが強い廈門の発展と高レベルな政治的変化の結果として現れた零細な多数の古美術商についての観察結果を述べ、人びとのライフスタイルのあり方がどのように変化したかを明らかにしたい。

## 古美術品取引——最初の体験——

廈門の調査事例を述べるまえに、古美術品取引の成長・発展が、いかに今日の中国における人びとのライフスタイルの変化と関係が深いかを述べたい。筆者がはじめてこの点について観察した機会は、福建省のある村（本稿ではS村と呼ぶ）においてであった。ここでは、地元の人びとの生計がアンティーク家具取引に依存する程度が非常に高い。筆者はある友人を通じて、S村をはじめて紹介してもらった。その紹介の仕方はこうである。

彼らは、まず古い商品市場（それはノミ市場のようなものであるが）で仕事をする行商人たちに頼み、さらにその行商人の別のところで仕事をする仲間たちに頼み、ようやく古美術品を大規模に扱う村のあることを教えてくれたのである。その村の存在を知ったのは、このような経緯からであるが、筆者はこうした人づてを頼らなければ目的にたどり着けなかったわけである。ともかくも、それによって

この調査が初めて可能となったことはいうまでもない。

こうして出会ったS村は、アンティーク（主に木製）家具ビジネスで有名なところであった。筆者はそこで二度（一九九八年夏の一日と九九年の旧正月の四日間）、短い期間の、しかも限られた内容の調査をした。だがこの村への訪問は、改革開放以後の中国における古美術品取引の研究の重要さという点で、筆者を大変刺激するものであった。

筆者が訪れたS村は閩中（福建中部）に位置し、商業地域の中心部からも遠くないところにあった。そこではさまざまな種類のそれぞれ独立した小店舗の集団が、食料品・衣類・文具類などの生活用品を売り、多くの村びとが古い木製家具や古代石でできた彫刻をそれぞれのやり方で売っている。彼らは同時に閩スタイルの古式豊かな家具のリサイクル製造を行い、古い木製家具の修理業も併せて営んでいるのだった。

しかし筆者の知る限り、それらの家具取引は村内で育った伝統的な熟練を持つものではない。というのは、このビジネスは一九八〇年代末になって、ようやくこの村に普及し始めたにすぎないものだからである。中国や近隣諸国でアンティーク家具の人氣が高まれば高まるほど、商売としてのアンティークについての供給と需要もまた高まったことが、S村でそれが普及した何よりの理由だったと考えられる。

さて、この問題をめぐって、さらに明らかな理由をいくつか指摘しておこう。第一に以前にくらべ輸出業務が容易になった、いわば自由な経済行為を行う企業が中国に出現していること、第二にアジアにおいて文化的アイデンティティの伝統を意識し、その具体的形成を求める新富裕層（多くは華僑・華人である）が現れたことであろう。また以上のような傾向と並んで、古典的な中国の木製家具についての大きな需要が一九八〇年代の美術品鑑定書の出現とともに、突如として高まったことが指摘できよう。そのことは、大手のオークション施設が音頭を取った、中国製アンティーク家具をテーマにしたいくつかの重要なオークションの実例が示すところでもある。それらが螺旋状になって、中国製アンティーク家具の需要を広げたのであった。

S村を訪ねた際、筆者は地元の人びとが自分のビジネスに自信を持っていることを知った。さまざまなアンティーク家具類や禁じられている古美術品を輸出するために、多くの人びとと関係を築き、かつ今もそれを続けていることに大変に驚いた。さらに、彼らは自分のビジネスを互いに、非常におおらかに行っているように見えた。彼らは他人が村でどんなビジネスをしているかに通じ、本来ならば競争相手のはずの他人に、自分の顧客を喜んで連れて行くのである。

これらの出来事は、価値観の変化と私営企業の急速な成

長を背景に、村びとがある種の「共犯者」になったのだということである。しかし、このビジネスに関わる村びとの割合がもつと大きいとすれば、それが非合法なことなのか、あるいはだれがその責任をとるべきかということは難しい問題となろう。なぜならば、倫理の基準が村全体の構造が変化することによって、その変化の中に吸収されてしまうに違いないからである。

また村で起きたことは、特殊なタイプのビジネスをめぐって生じた集団的「共犯」だけでなく、中国の農村で生まれている私営企業に関連する社会的変化を理解するよい例を我われに提供してくれている。一九七八年の改革開放以降、我われは個人の仕事の仕方やルールについて、中国政府のコントロールあるいは責任がほとんど及んでいないことを知るのである。同時に、市場経済の出現は百万長者になる個人の夢を刺激し、際限なく膨らませることになった。

沿岸部では市場競争の激化とともに、農村企業それ以外国からの投資が拡大し、疑似資本経済や情報のすばやい伝達が行われるようになるなど、社会経済的な変化が起きている。このような変化のもとで、いかに、そしてなぜ一つの村（このような現象が見られるのは村のすべてにおいてではない）で、以前存在しなかった特殊なビジネスが繁栄するようになったのかという点は深い研究を要することなのである。

そしてこの場合、社会の改革によって市場競争と貿易ネットワークの再興がもたらされたという点を除けば、沿岸部に位置する村の経済構造は、私営企業の流入によって変化したという側面が大きい。筆者が、なぜこれほどまでに多くの村びとが一つの村のなかで同じビジネスに従事しているのかS村で調査したとき、一人の村びとがあるタイプのビジネス企業に成功したことを契機に、他の多くの村びとがためらいなくまねをしたのだということを教えられたのだった。彼らのうちには友人や親戚のために働くうち、自分も本格的にそのビジネスに参入した者もいた。彼らにとって唯一の必要な経験といえば、村内からアンティーク家具を集めることくらいのことであつた。

それは、彼らにとつてはそれほど難しい経験を要することではなかったのである。市場経済に巻き込まれたという中国の経済的变化は、確たる現実的な方向性のないまま、その流れに巻き込まれるようにビジネスに参入してくる村びとに期待（一万ドル世帯になるという）を与えただけだといえるように思う。加えて、模倣的なサクセスストーリーが漂うという状況は、華南沿岸部に位置するある村の観察を通して、実によく確認されることである。

残念なことに、村の集団的「共犯者」としての側面を超えて、村の価値観の変化とか彼らの一族志向の強いネットワーク、そして政府当局との関係についてさらに深く理解

することはできなかった<sup>②</sup>。筆者は、アンティーク財をめぐる売買、窃盗、密輸、悪事がうずまく非合法の地下ネットワークに引き込まれることが嫌だったのだ。実際、村びとがいかに自分たちが、黄た梨や紫檀といった高価な材木でできた家具、木製彫刻など、禁止されている物を含む色々なアンティーク財を輸出できたかを落着いて話す様子を見て、筆者の心配は増幅したのだった。アンティーク取引をめぐる社会的、経済的発展には関心があつたものの、ついにその村での調査は続けることができなくなった。しかしその村から、アンティーク財ビジネスに関する方法について、価値あるさしあたりの多くのヒントを得ることはできたと思う。

## 政府の「アンティーク」の定義

### ——骨董と文化遺産——

「アンティーク」について、包括的かつ正確な定義を与えることは容易ではない。というのは、中国政府の定義によれば遺物または国家遺産であるが、国民にとっては美術品の一部、またこれをビジネスにしている者にとっては、富と所得機会をもたらす古代からの贈り物であるなど、人によって受け取る理解が異なるからである。中国におけるアンティーク財を全体的に観察するには、アンティーク財が

異なつたところで、それぞれのように捉えられているの  
かを知ることが不可欠である。

最初に、「オックスフォード英語辞典」であるが、これには、美術分野におけるその国の祖先の爲した仕事、そして古い家具、絵画、骨董品などもこれに当てはまるとされる、とある。あえていえば、一〇〇年以上の古い時代に使われていた、これらに当てはまるもの、といえるであろう。理論的にいえば、アンティーク財は過去を代表するもの、歴史を呼び戻すもの、そしてノスタルジアを目覚めさせるものにか、として定義されるべきではないか、と思われる。他のいい方をすれば、アンティーク財とは歴史の作つたものであり、社会的政治的文脈のなかで育つた、伝統的かつ特定の社会的階層、たとえば権力や国家財産に光を当てさせるようなものである<sup>③</sup>。

しかし、文化論的な視角から見れば、アンティーク財は国によつて様々であり、ほとんどが社会的政治的な定義の方の重みが大いなので、文化的な定義はしにくい性格をもっている。たとえば、中国社会ではほとんどの場合、アンティーク財の範囲は陶器（とくに王家や貴族のために作られたものの場合）、ビルマ翡翠、銀製の装飾品などのような貴金属、茶瓶、篆刻石、堅いあるいは赤い木で作られた明式の木製家具、毛沢東の一群の関連品そして古い紙幣などを含むいわゆる年代物におよぶ。しかし往々にして、この

ような疑問が浮かぶであろう。つまり、似通ったものなのに、あるものはアンティーク財でありあるものはそうでないのとはどうしてなのか、という疑問である。ある歴史的に価値があり希少な美術品に対して、我われは、大量生産を否定する観点から、歴史的かつ経済的評価を通じて高い価値を与えるのだ、というユニークな考え方を採用してもよいと考える。

中国語ではどうかというと、アンティーク財は古玩つまり「古くて鑑賞の対象になるなものか」というように理解されている。特別ないい方をすれば、玩という言葉は「遊ぶ」のに適しているなにか、という点に比重をおいた言葉である。とはいっても、ギャラリーや博物館を見ると、決してそうとばかりはいえず、「遊び」とは無関係なものも展示されている光景をよく見かける。そしてこれらの展示品は、一般的には文化遺産あるいは中国語でいう「文物」として分類されていることが多い。文物には、広い意味ではある種の文化遺産というニュアンスが含まれている。一方、アンティーク財の収集という点に注目すると、個人的趣味、歴史的遺産全体を代表する文化的な意味での遺産の収集、文化的伝統品あるいは国家的な遺産の収集ということになる。

したがって、多くの例を見るまでもなく、アンティーク財と文化遺産とをまったく異なった概念として分類する必

要はないことになる。というのは、アンティーク財は文化遺産になりうるからであり、同時に文化遺産もまたいつでもアンティーク財として定義される可能性を持っているからである。

文化遺産の意味について考慮するとなれば、おそらくは、その法的定義、買い取りや取引に関連する諸規制に目を向ける必要がある。文化財に関する最初の法律は一九三〇年代に制定された「遺産保護法」と呼ばれるものであるが、一九六〇年代には文化遺産全体に対して、さらに厳しい規制を持つ法律が制定された。一九六一年の「文化財保護および文化遺産管理規制条例」の制定によって、移動または固定する歴史的、芸術的、科学的価値を有する文化遺産は、国家財産であり売買あるいは輸出が禁止されることが規程されたのである。そしてこれに伴って、文物商店と呼ばれる国有のアンティーク財販売店が出現した。この販売店は、民間（大衆もしくは、とくに農村）に保管してある文物の収集を公的に認めたものということができる。

さて文物商店は、文物を探すために、収集役を農村に送って集めたが、この条例ではそれを自らが売ることが許されていなかった。この条例の輸出関連条項の規程に従えば、一七九五年（清代乾隆帝の統治期）以前、あるいは一七九五年以降のもので、かつ文化的価値の高い文化遺産の販売については強い規制下におかれた。加えれば、一九八二年

制定の中華人民共和国政府による文化財法によれば、文化遺産に関する定義は以下の如くであった。「文化遺産は国家により保護される。真の革命精神のつとり、あらゆるレベルの人民委員会はこの責務を負う。埋蔵文化財は国家所有とし、公的な許可なしで輸出することを禁止する」(第一条および一四条)。文化遺産に関してこうした厳しい規制があるにもかかわらず、現在の中国で、なぜ多くの文物がアンティーク財市場で売られ取引の対象になっているのだろうか。

廈門におけるアンティークビジネスの歴史については、道光時代に行われた開港と前後する街の開発時にすでに見られたという地方史誌がある。しかしアンティーク財取引について、詳しい記録は残されていない。本当に残念なことである。この仕事から退いたある人が筆者に話したことであるが、一九五〇年代には個人営業のアンティーク財販売店があったという。しかし、彼がそのビジネスをはじめた頃と閉店した頃の詳しい事情は覚えていないという。彼がいったことは、廈門のアンティーク財市場の誕生は北京のそれよりも、ずっと後のことだという点だけである。また文革期を通して、アンティークな文物の販売店は形式的に存在できなかつたし、商業的な活動をすることもできなかったという。というのは、この時期、アンティーク財全体についていえることであつたが、封建主義、迷信そして

古い流行と伝統の名残であろうと批判されたからである。ときに、このような風潮は個人批判の理由の一つとなつたほどである。

このような状況は、文物商店が新しいビジネスとして再開される一九八〇年代前期の経済改革がはじまるまで続いた。最近になって、筆者は、人気のあるアンティーク財が、贈り物、絹製の贈呈箱に入つた安もの、あるいはビジネス用の土産品であることをある業者から聞いた。さらに、その人物がいうには、将来はネット取引も検討すべきことであるとのことである。

## 廈門の発展とアンティーク取引

### ——華僑投資——

歴史的観点からいえば、廈門は多くの海外貿易や西欧の使節から持ち込まれた教育、医学それに一九世紀半ばからの缶詰産業、砂糖製造などを通じて、近代化の過程を経た地域である (Lau and Lee 2000, pp. 33-34)。一九三〇年代には福建出身の華僑による投資、とくに電話会社、水道会社など生活基盤に関連する開発投資によって、廈門はすでに重要な産業の近代化を経験していた (Ibid., p. 44)。中国は一九四九年から七八年まで長期間にわたって、孤立と国内のイデオロギー闘争による混乱から不安定な発展期を経

験するが、この点は廈門も例外ではなかった。

黄は『渦巻きの道——共産党指導者の目でみた中国農村の変化』第二版で、一九九六年、廈門の村を訪問したあとのことを次のように書いた。「ヨーロッパスタイルの大邸宅をモデルにした新築多層階の家々がリング上に並んでいる。どの家も、白塼、赤い陶器製の屋根、庭園にはフェンス、色彩豊かなガラス窓、車庫を持ち、古い村の中心部はきれいな苔で覆われている。新しいこれらの家々のほとんどの床は誇らしげな大理石でできており、大きなスクリーン型のテレビやカラオケ音響システムがあり、クーラーを備えた家もある。冷蔵庫はいまだ電話のように必需品となつてゐる」(Huang 1998, p. 199)。

黄は一九八〇年代の閩南地区の社会的変化と都市の発展ぶりを調査研究した結果、八〇年代と九〇年代の間にさまざまな分野で、大きな変化があったことに驚いた。廈門で起きた急速な変化と、電化製品をたくさん持つようになったことに象徴されるが、人びとの生活水準の大きな改善に彼は驚嘆したのである。それら物質文明の浸透をもたらした理由の一つが、この地域の生活基盤の改善であったことにも大変驚いている。

このような急速な発展は、たんに廈門だけに見られる現象なのか、それとも福建省全体あるいは中国全土に見られるものなのだろうか。筆者が閩南で伝統と社会的変化につ

いて調査をしているときのこと、この地方の人びとはビジネスに長けていて、それは彼らの伝統であり地域的な特徴なのだ、と聞かされたものである。物資の輸送に適しているという地理的条件のよさや、沿岸部における開放政策と社会開発上の効果が発揮されやすいという利点を考慮しても、廈門の発展が成功した背景には、こうした地域的な伝統が寄与している点は明白な事実である。

ホーエルは廈門が華南沿岸部でも最も早く経済開発特区に指定された地域であることについて、少なくとも三つの要因がその理由として挙げられるとした。つまり、特別の政策を受けやすい条件を持っていたこと、華僑ネットワークを持っている地域であったこと、そして地域的な先行性をもっていたことである (Howell 2000, p. 125)。

福建省の主要な三つの都市について、その発展状況に関する簡単な歴史的な比較をしただけでも、閩南における廈門の経済的発展は群を抜いていることが分かるであろう。福建省のこれら三つの地域で際だっていることは、陳が指摘するように、閩南の人びとは北方の新華や福州と大変違った定住と開発をしてきたということである (Chen 1998)。言語の關係から互いに会話できないというだけでなく、これらの三つの地域には、社会的、歴史的な発展状況が明らかに異なっている。陳がいうように、閩南の人びとは一般的に、沿岸貿易と商業活動についての強い伝統が作用して



いる。一方福州の人びとは国家や政策といった次元についての関心が高いことが明らかである。新華の人びとの場合には、子弟の教育（関連して、彼らの場合、他の福建人にくらべ学位保持についての関心が高い）の推進やさまざまな分野で政府関係の仕事に就くことに興味が旺盛である。

廈門が大きな変化を遂げたのには、いくつかの要因がある。これらの要因として、輸送上の都合のよさ、海外ネットワーク、農村部をはじめとする大量の移動労働力の存在である。廈門は福建省のなかでも国内からの労働力移動の受け皿であると同時に、都市的発展をすることで労働者に高額所得を与えたり、新しいビジネスを起こすに都合のよいところだと思われる。たとえばその真偽は不明であるにしても、筆者が調査した課題の一つは、もともとは農村からここに移り住んだ人たちが作ったコミュニティの出現についてであった。したがって、新しく移り住んできた者たちがアンティーク財ビジネスをしながら作ったコミュニティに焦点を当て、どのような諸要因が彼らの定着のあり方に影響を与えたのか、について検討し、考えてみることにした。また、改革以降において、そこに住む人びとがよりよい生活を求めながら、いかに利益の上がるアンティーク財商店街を作ったかを明らかにしたかったのである。

この調査研究は一九九九年と翌年行った筆者のアン

ティーク財商店街に関するものであるが、その機会に、数年にわたってアンティーク財取引を行ってきた個人業者に直接インタビューを行った。廈門の事例を通じて、筆者は流動民に属する零細なアンティーク財商人を見るという視点から、それが集中するアンティーク財商店街の意味することを解き明かそうとした。これら農村部から都市部へ移り住んできた商人は、それまで安定した居住環境をもつことのなかった存在である。

## 白鷺州アンティーク財商店街

一九九九年の夏、自分が興味を持つ調査課題とフィールドを求めて、筆者は廈門を初めて訪れた。そこで現代中国におけるアンティーク財取引の社会的重要性を理解するつもりだった。廈門ではいくつか観光旅行者の行く場所を訪れたあと、アンティーク財取引がまったく一般的かつありふれたことであることを知ることになった。そこには、飾り気のない粗末な店から豪華に飾り付けられた一流のホテル店舗まで並んでいた。しかし筆者は、ここで取り上げている「アンティーク」（あるいは古玩）の実態を知るのであるが、それらは、本当にユニークで高価なアンティーク財から模造品や手作りされたものまでが、大部分が観光に訪れた人びとに、高価な土産品として売られていたのであ

る。

廈門のアンティーク財取引に関して別の状況を知っている何人かの人から話を聞いたあと、筆者は、市内の故宮通りと白鷺州の二か所へ行くとよいと教えられた。そこへ行けば、特に白鷺州では多くのアンティーク財販売店を見つけることができるし、評判によると、その商店街には一〇〇軒以上に上るアンティーク財販売店があるということであった。さらに、販売店の店主の多くは、別々の地方から来た者たちだということではないか。とくに漳州から来た者が多いという話だった。この話によると、元々廈門にいた人たちは本当に少なかった。

廈門の人たちの多くは白鷺州のアンティーク財商店街で売られているアンティーク財のほとんどは、偽物であるから大部分はあとで手作りされたものか、あるいは工場で生産されたものであろうといった。あるいは、そのアンティーク財のほとんどがコピーあるいはコピーをコピーしたもの（本を見て作られたものやコピーしたもの）だろうとのことだった。それらが本物が偽物かをいうことはできなかったが、そこで売られているアンティーク財について、少なくともその質を見分ける能力を持つことが必要ではないかと思つた。

観光旅行者向けの模造品あるいは手作り品という問題は別にして、筆者が白鷺州で見たアンティーク財商店街のあ

る部分は、前代から受け継いだものという意味でのアンティーク財という意味ではなしに、ゴミのようなものを含めて、ある意味では文化遺産として分類されるのではないかと思う。例外はあるものの、本物はそれほど多くはないことは確かであろう。アンティーク財商店街についての地方政府による監督行政であるが、この商店街が建設されたすぐあとに政府の役人が来て、様々なアンティーク財の分類を求めたらしい。彼らが行った公的な分類は三つに分けられるそうである。①自由に販売してよい普通のアンティーク財、②国内販売のみ許されるアンティーク財（この場合、ラベルを貼ることが義務）、③展示や鑑賞用に用いられ、販売は許されないアンティーク財（同）。これによって、あるアンティーク財は検査され、ラベルを貼られたが、それらのうちのあるアンティーク財は定義どおりの文化遺産であるが、かといって芸術的な分類ができるとは限らないものも含まれていた。

最近の一〇年間、国内移動して廈門に來た人びとは、新しい人気ビジネスとしてのアンティーク財取引の現状を見て、なぜこのような現象がかくも早いスピードで短期間で起こったのかを考えはじめた。筆者の知る限り、彼らの大部分はこのビジネスを家族から受け継いだわけでもなければ、似たような場所で訓練して來たわけでもない。だから、アンティーク財ビジネスというものが、彼らのような外部

から流入してきた者にとって簡単にできるものなのかどうか、筆者には疑問が湧いた。ただし、この疑問に自ら答える確信と結論を見いだせるだけの資料がない。しかし、それが一九七〇年代にはじまった経済改革と深く関連していると推測することはできる。特に、国有企業が徐々に私営企業に置き換わり、計画経済が市場経済へ大きく転換したこととの関連が深いように思われる。

筆者がアンティーク家具志向の強いS村の観察をして分かったことだが、この地方の人びとは豊かになるタネを探し、同じ言語を話す人びとのあいだや村と村の結びつきの大きいネットワークのなかで、自分の成功話を広げたいという思いが強い。廈門は一九八〇年に経済特区に指定され、その結果としての近代化への変化と都市化が、そうした将来的展望と最も重要な沿岸部の都市に住む者としてのステータスを求める心理を生んだといえるように思う。白鷺州は廈門のなかでも、もつともドラスチックに発展した例だと思ふ。この地区は、歴史的にいつても沿岸部の重要な地理的環境を持ち、漁船の基地としても栄えた簕簕地域に属する。一九八〇年代のはじめから、土地が不足して外延的な発展ができなかった沿岸部という制約を持ちながら、簕簕はやがて廈門の新市街地としての役割を求められるようになる。

しかし白鷺州の西部と東部とでは、まったく異なった様

相を持っている。西部地区では、市役所をはじめとする公共施設、人造湖、音楽噴水、香港返還記念の際に設けられた彫刻などが集中する垢抜けた地域である。これに対して、東部はいわば歓楽街であり、ディスコ、飲食店、ナイトクラブ、巨大ホテル、子供の遊園地そして多数の商店が並ぶ地域である(Lin 1999, pp. 24-25も合わせて参照願いたい)。

その地域の商店街ができたのは、アンティーク財取引が行われる計画はなかったといわれる。一九九〇年代のはじめ頃の商店街は、主として、地元の人びと向けの衣料品を売るという程度であった。ところが、期待に反して衣料品の購買客は少なく、そこで、やむなく衣料品街を閉じることになった。このような経緯を経た一九九七年七月、ここは白鷺州開発公司という私営企業が運営するアンティーク財商店街に生まれ変わったのである。新しい管理運営企業の誕生によって、店子は月二〇〇から三〇〇元の水道光熱費のほかに、一二五〇元の家賃を払わなければならなくなった。

そのはじめの頃は、故宮通りからその新商店街へ転居してきたのは約二〇店舗であった。それ以外の商店のほとんどは、廈門以外の福建省から来た人びとによって占められ、その多数を占めたのは漳州からきた人びとであった。その理由はなるほどと思わせるのであるが、その開発公司を起こした三人のうち、一人は漳州出身であり、いわゆる「漳

州コネクション”が、そのビジネスネットワークとしての主要な役割を担っていたのである。その彼らに、なぜアンティーク財販売をするようになったのかと聞いたところ、その答えに共通性があることに気づいた。そのうちの一人がいうには、彼らは村にいたときから、だれかが集めてきたアンティーク財を売るのが常であった。また別の店主がいうには、捜し物をしている顧客から、これこれのものが欲しいと頼まれて、陶器や彫刻、木製家具といった古い品々を集めることが仕事であった。そこで、探している物を見つけ出すと、彼らはそれを買ひ、買主からの報償金と引き替えにその品を手渡すのだという。

時が過ぎ去り、やがて彼らは自分が持っている知識以上に価値のあるものを扱うようになった。その蓄積のもとで、彼らは自分でそのビジネスに直接乗り出すようになった。実際、同じ村に住む知り合いに大きく依存しながら、自分で仕事をする機会を持つようになっていったという。前述したようなS村の出来事を見るにつけ思うことは、アンティーク財ビジネスの誕生には、他の地域にも当てはまる一般的要素がありそうだということである。つまり改革開放後の中国の私営企業のあり方と関連することだが、村のネットワーク志向型の拡大という論理である。

白鷺州の経験は多数の漳州に住む零細なアンティーク財取引業者に、独立した営業ができるのだという先例を与え

る役割を持ったといえる。これは、かくも猛烈な勢いでその商店街に多数のアンティーク財取引業者が集まった理由はなぜなのか、という疑問に部分的にはあるが答えているように思う。彼らは同じ商店街で、熾烈な販売競争をしている。同時に、競争しながらも、互いに知識と商品集めについては支え合っているという不思議な関係にある。筆者の観察によれば、彼らは経験を分かち合い、価格設定や多種多様なアンティーク財についての真贋を見分ける知恵を出し合っているのである。

## 考 察

二〇〇〇年七月、二度目の白鷺州訪問のとき、その商店街にはある変化があることに気づいた。最初のときにくらべると、商店や飲食店の数はさらに多くなっていた。また商店街の向かい側の地区にも、ディスコやナイトクラブがかなりできていた。さらに、建設中のホテルまであった。しかしもっと重要なことなのだが、以前は買い物客のためにあった商店街は、かつてはあったショッピング地域には、すでになくなっていたことである。それに代わって、海外から廈門に移り住んできた商店主の家族が住む二階建て商店が作る、一種の移住民コミュニティができあがっていたのである。

たとえば北京の国内からの移住者と単一のビジネスコミュニティとの関係に注目した項は、移住労働者と農村部から来た零細な商人の場合とでは違いがあるとした(Xiang 2000)。同業の零細な商人同士は互いに緊密に付き合うことはせず、新しい環境のもとで、同じ会話ができる者同士だけの小さな狭いコミュニティを作るのである(Xiang 1999, Zhang 2001, Zhuang 2002)。実際、廈門のアンティーク取引は、将来の生活のより良い展望が切り開けない急激な社会的変化に直面しながらも、生活水準の改善を願う人びとによる利根的な状況を反映している。しかし、彼らはアンティーク財が集まる見込みがなくなっても、ここに住み続ける以外にない。もしそうであっても、農村には彼らの生活を良くしてくれる条件がない以上、新しい生活手段を探しながら、そのまま住み続けるしかないのではないか。

こうした状況について、ある若い商人は、コンピュータ技能を学びながらセールスマンとしての腕を磨きたいという。彼がいうには、もはやアンティーク財商売は不安定で将来性もない。そうではあっても家族の稼ぎ柱にとって、移り住んできた配偶者や子供たちには、農村の低所得しか得られない農業労働を続けるよりも、もつとよい仕事をそこで見つけるしかないのだと言いつつ以外にない。

彼らの生活の仕方を評価するならば、将来の夢ばかりを追う非論理的な、そして非常にその場しのぎで、利根的か

つ展望の欠くものであるといえる。そもそも彼らは、自分の仕事を、長期的な計画性なしにはじめた。アンティーク財ビジネスには、そもそも確実性と安定性はなかったからである。たとえば、彼らのほとんどが筆者に対していうには、市場には需要があつたし、彼らの関心も本当に良くてユニークな品が集められるかどうかにあつた。しかし、だんだんと偽物やコピー品が氾濫するようになり、期待した品質のいい物が集めにくくなり出したのだという。

アパデュライは『物の社会的生命』(Appadurai 1986, p. 5)のなかで、次のようにいう。「物質そして物というのは一般的に、さまざまな人類学にとって独立した関心と呼ぶものである。それらは、考古学者における最初で最後の原則の一部である。また、物質文明の一部分であり、考古学者と文化人類学者が融合する媒介でもある。価値として、物質や物は経済人類学の核心をなすものであり、少なくとも贈与行為の中心的役割を持ち、交換と社会に関する人類学一般の中心的考察の対象となるべきものである」。

ここで、我われはアンティーク財について、次のような定義を行うことができるのではないか。つまり、S村のためには「私営企業」、社会発展の状況下においては「アイデンティティ」、そして福建の近隣農村から来た零細な自営業者にとっては「生活条件の改善の機会」という三つの定義である。

以上の考察を踏まえ、筆者はアンティーク財の意味を、次の三つの類型に分類できるといふように要約しておきたい。

第一は、貴重な価値を持つとして選別された文化財である。その理由は、アンティーク財は歴史的そして芸術的な価値を持つからである。第二に、国家としてのアイデンティティの形成に役立つものである。第三に、高い経済的価値を持つものを含むもの、ということである。つまり人びとの貧困を払拭するのに貢献し、改革後の中国人の生活水準を改善する意味でのビジネスとなったということである。

一九七八年以来、零細な商人の社会的、政治的地位は確実に改善された。この二〇年、メディアの影響と中国の近代化によって、変化した価値観を伴いつつ、中国政府による奨励政策が続いたことで、私営企業が経済の重要な一角を占めることが可能となった。不十分な研究ではあるが、アンティーク財ビジネスの出現に関連する異なった社会的諸要因の考察を通じて、筆者は、少なくとも三つの基本的な要因を指摘したい。

その三つとは、①国内からの移住民の社会的ネットワークが、人びとが中国の社会的変化に適応するための手段となっていることを理解するために重要であること。②廈門におけるアンティーク財取引が新しくもたらしたコミュニティの出現のことを考えながら、改革後の中国の沿岸部に

ある多くの村や町そして市で起きていることを理解するモデルとして位置づけることができること。③一九八〇年代にはじまる経済改革と、それに関連して個人の生活スタイルの変化が起きたが、これらの変化は、国内移住者の都市への流入、都市での高額の所得を求めている利根的な動機、そして新しく形成されたコミュニティという観点からまとめることができる。

現在もまた、地方的なレベルのネットワークの連係とよりよい条件を求めて結び付き合う人びとという現象、同時に、個人が成功を求めて休みなくチャンスを探す現象は続いている。最後に付け加えれば、これらが筆者が調査した廈門のアンティーク財商店街の実態と諸関係である。そしてこの点は、少なからず華南沿岸部には部分的にはあれ共通することではないかと思われる。

〔付記〕 この論文の元となった調査は、研究助成諮問委員会（RGC）の補助によって可能となった『伝統・変化・アイデンティティ——中国と東南アジアにおける閩南人に関する研究』である。

またこの論考の元となったのは次である。“The Occupational Paper Series No. 128, published by Hong Kong.” Hong Kong Institute of Asia-Pacific Studies, The Chinese University of Hong Kong, 2002.

注

〈1〉「新富裕層」は、中国美術品を収集する世代に関連し、欧米の手法を通じて高度な知識と教育を受けた者達である。彼らは世界中を旅行している。彼らの両親世代にはもっと親しみのあった地方的文化的のルーツからは遠ざかる志向性を持つ。言い換えれば、彼らのルーツについての意識は、アンティーク財に対するその場限りで文化的アイデンティティや特別な物を求めるものではない。

〈2〉人類学的研究において見られる「共犯」の観察については次を参照。Geertz 1973, Marcus 1997. 中国農村のモラル仮説については黄 (Huang 2002)。

〈3〉故宮博物館のワトソンの調査 (Watson 1998) 参照。王朝美術品の収集から、人民の所有としての国家遺産への遺物に関する社会政治的意味の変化に関する考察である。

〈4〉実際、筆者は退職した大学教授に対して政府が依頼した鑑定を見たことがある。その目的は、ある遺物が白鷺州に保管されていたものであることに同意することであった。

参考文献

Appadurai, Arjun ed. 1986. *The Social Life of Things: Commodities in Cultural Perspectives*. Cambridge: Cambridge University Press.

Chen, Jiping. 1998. *Minan People: Journal of Guangxi University for Nationalities*, 20 (3): 58-61.

China Market. 1993. Where is the Cultural Relic Market? *China Market*, 1: 8-10.

De Varine, Hugues. 1983. The Rape and Plunder of Cultures: An Aspect of the Deterioration of the Terms of Cultural Trade between Nations. *Museum* 35: 152-7.

Doar, Bruce. 1998. Raiders of the Lost Tombs. *Far Eastern Economic Review*, July 30.

Geertz, Clifford. 1973. *The Interpretation of Cultures*. New York: Basic Books.

Howell, Jude. 2000. "The Political Economy of Xiamen Special Economic Zone," in *Fujian: A Coastal Province in Transition and Transformation*. Edited by Y. Yeung and D. Chu, pp. 119-142. Hong Kong: The Chinese University Press.

Huang, Shu-min. 1998. *The Spiral Road: Change in a Chinese Village Through the Eyes of a Communist Party Leader* (2nd Edition). Boulder, Colo.: Westview Press.

———. 2002. Economic Culture and Moral Assumptions in a Chinese Village in Fujian. *Asian Anthropology*, 1: 59-85.

Lau, Yee-cheung and Lee Kam-keung. 2000. "An Economic and Political History," in *Fujian: A Coastal Province in Transition and Transformation*. Edited by Y. M. Yeung and David K. Y. Chu, pp. 25-55. Hong Kong: The Chinese University Press.

Lin, Sha. 1999. *Huashuo Xiamen* (About Xiamen). Xiamen: Xiamen University Press.

Marcus, George E. 1997. The Uses of Complicity in the Changing

Mise-en-Scène of Anthropological Fieldwork. *Representations*, 59: 85–108.

Murphy, David. 1995. *Plunder and Preservation: Cultural Property Law and Practice in the People's Republic of China*. Hong Kong: Oxford University Press.

Watson, Rubie S. 1998. Tales of Two "Chinese" History Museums: Taipei and Hong Kong. *Curator: The Museum Journal*, 41 (3): 167–177.

Xiang, Biao. 1999. "Zhejiang Village in Beijing: Creating a Visible Non-state Space through Migration and Marketized Networks." In *Internal and International Migration: Chinese Perspectives*. Edited by F. N. Pieke and H. Mallee, pp. 215–250. Surrey: Curzon Press.

———. 2000. *Kuoyue bianjiede shequ: Beijing "Zhejiang cun" de shenghuo shi* (Cross border community: Life history of "Zhejiang village" in Beijing). Beijing: Joint Publishing Company.

Zhang, Li. 2001. *Strangers in the City: Reconfigurations of Space, Power, and Social Networks within China's Floating Population*. Stanford: Stanford University Press.

Zhuang, Kongshao. 2002. "The Development of Ethnic Cuisine in Beijing: On the Xinjiang Road," in *The Globalization of Chinese Food*. Edited by D. Y. H. Wu and S. C. H. Cheung, pp. 69–85. Surrey: Curzon Press, and Honolulu: Hawaii University Press.

(邦訳 高橋五郎)